

Title	カッシーラーの芸術論：「シンボル形式」としての芸術の位置づけを巡って
Author(s)	齊藤, 伸
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 333-347
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4942
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

カッシーラーの芸術論⁽¹⁾

——「シンボル形式」としての芸術の位置づけを巡って——

齊 藤 伸

はじめに——『シンボル形式の哲学』と芸術

本稿の主たる関心は、現代ドイツの哲学者エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) の主著『シンボル形式の哲学』(一九二三—一九二九) における「芸術」の意義を明らかにすることである。この広く知られた全三巻からなる著書は、それぞれ「言語」、「神話的思考」、「認識の現象学」と題されており、「芸術」に関する独立した論考は含まれていない。しかしながらカッシーラーにとって芸術は、一貫してこれらの主題と並んで言及される主要な「シンボル形式」の一つであり続けた。そのことは次の言葉からも明らかであろう。

精神文化のさまざまな所産——言語・科学的認識・神話・芸術・宗教——は、こうして、すべてそれぞれ内的な差異をもちながらも、ただ一つの大きな問題連関の一部となる。そして、精神がはじめそこに捕らえられていたかに見える単に受動的な諸印象 (Eindruck) の世界を、純粹に精神的な表現 (Ausdruck) の世界

に作り変えるという一つの目標に向かう努力の多様な出発点になる。⁽²⁾

これは一九二三年に上梓された『シンボル形式の哲学』第一巻での彼の主張であり、「芸術」が一連の探求において考察されるべき事柄の一つに据えられていることは明らかであろう。しかしながら彼のそうした芸術に対する理解とは裏腹に、一転して同書の冒頭ではその全体の構想が次のように語られている。

目下のこの第一巻は言語形式の分析に限られ、第二巻——これは一年以内に出したいと思っている——は、神話的・宗教的思考の現象学の構想を内容とするはずであり、最後の第三巻では本来の「認識論」、つまり科学的思考の形式論が述べられるはずである。⁽³⁾

ここでは全三巻の内容は、「言語」「神話的思考」「認識論」になるとされており、どうやら一九二三年の時点ではそもそもそのなかに「芸術論」を独立した論考として宛がう計画はなかったようである。しかしながら彼は、人間が文化を生み出す精神的な機能とはいかなるものかを明らかにしようとする『シンボル形式の哲学』にとって、芸術論が不可欠であると考えていたことは先に引いた言葉からも明瞭である。また、晩年にアメリカに渡ったカッシーラーがポール・シルプ (Paul Schipp) に宛てた手紙では、この当初の計画に関して異なる見解を伝えている。彼は英語版『シンボル形式の哲学』を出版するように請われたが、それに反して一九四四年に新たに人間学の問題を中心に論じた著作 *An Essay on Man* (邦訳『人間』) を上梓することになった。⁽⁴⁾ その著作との関係から彼は次のように述べている。

その本は内容については新しいものとなるでしょう。というのは、私は自分の美学理論をそこで始めて詳し

く書き表すことになるだろうからです。すでに『シンボル形式の哲学』の最初の草案において、芸術についての巻を書くことを考えていたのですが、時代のもたらす不幸がその遂行を幾度も延期させたのです⁽⁵⁾。

ここで彼が「最初の草案において」と述べている部分は、最初に引いた第一巻で述べられている構想と矛盾しているが、カッシーラーにとつての芸術が、晩年に至つて初めてその価値が認められたと考えることはできない。というのは、彼によつて発表された芸術論は、確かに晩年に集中しているようではあるが、しかし「芸術」は当初から「シンボル形式」の一つとしてはつきりと認められており、とりわけ一九二五年に著された『言語と神話』においては、その意義が強調されてさえるからである。さらには、彼の遺稿集の第一巻に収められた「シンボル形式の形而上学」という草稿は、本来は『シンボル形式の哲学』第三巻の結論部として一九二八年に用意されたものであるが、そのなかで主張されている芸術に関する議論は、後年に彼が語つたものと共通する内容を含んでいる。そのためカッシーラーにとつて「芸術」の問題は、やはり『シンボル形式の哲学』の構想段階から、絶えずその意義を失わなかったと考えるほうが妥当であろう。しかしながら、やはり私たちが用い得る彼の芸術論に関する資料は、その他の研究に比べると圧倒的に少数ではある。本稿ではそうした僅かな資料から、彼の哲学における芸術の意義を再考したい。

1. 「シンボル形式」としての芸術の基本的特性

カッシーラーの言うシンボル形式とは、「それを通じて或る精神的な意味内容が具体的な感性的記号と結びつき、またそれがこの記号に内的に受け入れられるような、各々の精神的な力 (Energie des geistes)⁽⁶⁾」である。先に引いた言葉

では、「受動的な諸印象の世界を、純粹に精神的な表現の世界に作り変える」と言われているように、それは能動的に作用して、独自のパースペクティヴを創り出す機能である。同様に「シンボル形式」としての芸術の機能もまた、独自のパースペクティヴを創り出す点にその本質がある。そのため彼は、「見る術を心得る」(sapere vedere)と言ったルネサンスの巨匠ダ・ヴィンチの芸術観に同意して、次のように主張する。

ひとたび、私たちが芸術家のパースペクティヴに立ち入るやいなや、私たちは彼の眼をもって世界を見ないわけにはいかない。あたかも私たちは未だかつて世界をこのような特別な光のもとでは見たことがなかったかのように思われる。しかし、私たちはこの光がただ瞬間的なフラッシュではないことを確信している。芸術作品のおかげで、その光は持続的となり、永久的となった。ひとたび現実がこの特殊な方法で私たちの眼前にさらけ出されたならば、私たちはそれ以後、現実を常にこの形状のものとして見るのである。⁽⁷⁾

芸術の才能は言語の才能とは異なり、万人に等しく与えられるものではないが、そこにはカントが言うように「普遍性」が認められる。そのためカッシーラーによれば、私たちはかつての天才たちが創造して用いた認識の形式を後からそれを辿るように獲得し、その形式にしたがって世界の「客観化」を行っているのである。また、彼によれば「他のすべてのシンボル形式と同様、芸術はただ、既成の、与えられた現実の再生 (reproduction) ではない。それは物および人間生活に関する、客観的な見解に至らせる方法の一つである」⁽⁸⁾。そのためカッシーラーにとつての芸術とは、人「美」という特殊でありながらも普遍性をもつ形式を与えることによつて、新たな「客観化」を可能にさせる機能であると要約することができる。続く考察では、このカッシーラーの言う芸術形式による世界の「客観化」とはいかなるものかをさらに詳細に考察したい。

2. 言語と芸術における異なる客観化の道程

現実の強化としての芸術

カッシーラーはしばしば芸術の機能と、言語の機能とを比較して論じており、『人間』において彼は両者の差異を印象的にも次のように叙述している。すなわち、「言語と科学は現実の簡略化 (abbreviation) であるのに対して、芸術は現実の強化 (intensification) である」と。彼にとつての芸術は、決して現実の「捨象」ではなく、むしろ言語や科学のほうが、多彩な特徴を示す諸々の対象を区別・分類することによって私たちが接近しやすいものとしている。そうした意味では、やはりそれらは現実の「簡略化」であると言えるだろう。しかしながらカッシーラーによれば、芸術は対象の「形象的直観」を捉える形式であるがゆえに、けっして概念的単純化や演繹的一般化を必要としない。それゆえ芸術は、言語や科学とは異なる方向へと展開する認識機能である。「太陽は日々新しい」というヘラクレイトスの言葉は、自然科学的な認識にとつては妥当しないとしても、芸術家の認識にとつては真理であり得る。また、たとえば二人の芸術家が、自然科学的な意味で「同一の対象」を描いていると言うことができるとしても、美的経験のレベルにおいてそれは妥当しない。私たちは、二人の芸術家が捉える「同一の現実」というものを語ることはできないのである。カッシーラーはこれらを明確に区別して、次のように主張する。すなわち、「感性的知覚において、私たちは周囲の事物の共通で恒常的な姿を知ることと満足している。美的経験はこれと比較にならないほど豊富なものである。それは普通の感性的経験においては認められることのない、無限の可能性で充たされている」と。⁽¹⁰⁾

そのためクロイス (John Michael Krois, 1943-2010) も言うように、カッシーラーにとつての芸術は単なる美学的充足を与えることや、趣味、あるいは現実逃避でもなく、「単なる(経験的な)観察には見ることでできないような生命

の認識を可能にする^⑪。したがってその目的は、現実の世界が内包している無限の可能性を具現化することであり、それこそがカッシーラーの言う芸術形式による客観化の機能である。

客観化へのもう一つの道筋としての芸術

ところで、カッシーラーはその名も「言語と芸術」と題した晩年の講演（一九四二）のなかで、言語と芸術を比較しながら、その冒頭で文化における「言語」の意義を明確に認めて次のように言う。すなわち、「人間は言語という媒体の外では呼吸をすることができない。というのは、言語は精神的大気のごときのものであり、人間の思考と感情の、また人間の知覚と概念との全面にゆきわたり、充ちているものだからである^⑫」と。彼にとつての言語は、私たち人間が客観的な世界へと至る道を開示する条件であり、それゆえ彼は「言語能力は結局のところ、とりわけ人間学的な（anthropological）概念であり、とりわけ人間学的な能力である^⑬」と言う。したがってカッシーラーの言語観は、ヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744-1803）が『言語起源論』（一七七二）の考察において力説した言語の人間学的考察という視点を受容していると言える。しかしながら彼は、それに続いてただちに次のように問いなおす。「しかし、これが唯一の道であると私たちは言い得るであろうか。言語を欠くならば人間は暗黒のなかに見失われ、人間の感情・思想・直観は暗々として不可解のうちに包まれる、^⑭と言い得るであろうか」と。カッシーラーはこうした問い立てから出発して、人間の世界を二つに分類する。すなわち一方は科学的思考へと展開する言語能力・言語的象徴に基づく世界であり、もう一方は音楽や詩、絵画や彫刻から成る芸術の世界である。言語的世界においては、「概念」が現実へと接近する手掛かりとなるが、芸術的世界においてはその実在を「具体的に個別的な形で直観^⑮」する。既に述べたように、カッシーラーにとつての芸術はこうした直観の形式を生み出す生産的な機能である。言語的な認識における直接的具體性は、それが科学的思考に接近するにつれて次第に薄れていく。言語はやがて世界を自然科学的な仕方では把握する新たな形式として作用し始め、日常的な言語からやがて科学的な言語となる。それは

確かに人間の精神が辿るべき客観化の極めて重要な道筋の一つである。しかしながらカッシーラーは、先に述べたように、それとは異なる「客観化」を芸術のうちに見ている。彼によると、「芸術においては、私たちの感覚的経験の地平が拡大されるだけでなく、私たちの視野、つまり、実在についての私たちの眺望が変化する」⁽¹⁶⁾。たとえば言語は、一方では科学的な思考へと向かい、他方では芸術的な言語、つまり「詩」へと向かつていく。⁽¹⁷⁾ それゆえカッシーラーによれば、人間の世界はここで二重になる。彼の理解では、両者は異なる性質をもつ世界であるにもかかわらず、根源を一にしている。その共通した根源とは彼が『シンボル形式の哲学』第二巻で主題に据える「神話的思考」であり、それによつて彼は人間の精神を二つの異なる方向へと進む客観化として包括的に理解する。続く考察では、この芸術的な世界と他のシンボル形式の世界との相違をさらに詳細に見ていくことにしよう。

3. 特異な認識機能としての芸術

『言語と神話』における芸術 『言語と神話』は一九二〇年代におけるカッシーラーの芸術理解を明瞭に示す資料である。そこにおいて彼は、ヘルマン・ウゼナー (Hermann Usener, 1834-1905) が神々の名称に関する研究のなかで説いた「瞬間神」(Augenblicksgötter) という概念を手がかりとして、神話と言語が並行的な発達過程を辿るものとして理解した。⁽¹⁸⁾ カッシーラーの言う「神話的思考」もまた、精神における客観化の過程の一つであり、人が自然現象などに抱く何らかの神的な印象に対して与える名称が変化することにつれてその抽象度は高まってゆき、やがて神話的思考は言語的思考となり、最終的には科学的思考に結実する。このように彼は神話的思考を、やがて科学的思考に至る精神の弁証法的発達の出発点と見なしている。⁽¹⁹⁾

しかしながらカッシーラーは、このような神話的思考が言語化あるいは抽象化されることによって科学的思考に至るといういわば「直線的な」発達過程のみを捉えるのではない。そこには精神の発達におけるもう一つの複線が存在するのであり、それによってカッシーラーの『シンボル形式の哲学』は、単なる自然科学的認識の優越性を強調することや、あるいは単なる主知主義的な観念論に陥ることから免れている。すなわちそのモメントこそがシンボル形式としての「芸術」である。神話的思考から言語へと繋がる発達は、自然科学的思考の発達を叙述するものとしては極めて興味深く、また有意義であろう。しかしながらカントが『純粹理性批判』においてその可能性に気づいているように、人間の認識機能が自然科学的認識に終始するものではないことは自明である。その点を踏まえてカッシーラーは、すでに一九二五年の時点で『シンボル形式の哲学』の体系のなかに「芸術形式」を採り入れることによって、言語や科学とは異なる領域へも敷衍可能な体系としての『シンボル形式の哲学』を構想していたものと考えられる。そのため彼の哲学において芸術は、その他の形式からは特異なシンボル形式で、人間の認識機能にいわば「生彩」を与えるものと理解されている。この点に関してカッシーラーは『言語と神話』において、言語・神話・芸術の三項関係を次のように叙述する。

進化の過程において、語はますます単なる概念的な記号 (Begriffszeichen) の地位に還元されてゆく。そしてこの分離と解放のプロセスは、もうひとつ別のものによって対比させられる。すなわち芸術が、言語と同じように、元来まったく神話に結びついているのだ。神話と言語と芸術とは、具体的な不分離の統一体として始まり、ただ徐々に精神的創造性の独立した方式の三つ組へと解体してゆく。⁽²⁰⁾

ここでの彼の芸術についての記述はまことに僅かではあるが、芸術に対する彼の基本的立場を明瞭に表現したものと

して有意義であろう。というのも、上述したように彼の芸術論は晩年の一九四〇年代に至って初めてまとまった論述を見るが、ここでは『シンボル形式の哲学』の構想段階においても精神の「複線の展開」としての「芸術」に一定の地位が与えられていたことが浮き彫りになるからである。ここでカッシーラーは、かつて同一の精神的な力を保持していた言語と神話との関係を繋ぎ止める役割を芸術のうちに見ており、それは言語が漸次的に抽象度を増すにつれて失っていく生彩を取り戻す機能を果たしている。カッシーラーはこの点について更に次のように主張する。

言葉が本来の創造的なちからを保持するばかりでなく、たえず更新してやまないような領域、言葉が一種の
不断のよみがえりと同時に、感覚でありかつ精神的であるような化身とを行うような知的領域が存在するの
だ。こうした再生 (Regeneration) は、言語が芸術的表現に通じる道になるときに成就される。ここにおい
て、言語は生命の充実ぶりを取り戻す。しかしそれはもはや神話的に束縛され拘束された生命ではなくて、
審美的に解放された生命である。⁽²¹⁾

このように、カッシーラーが一九二五年の著作において既に芸術に対して重要な働きを認めていたことは明らかである。マイケル・ホルクイスト (Michael Holquist) は、カッシーラーにとつての芸術と美学は、神話と科学の双方に對立しているが、それは個々のシンボル形式を孤立させることなく、それらを結びつける役割としてもつとも重要である⁽²²⁾と言う。そのためカッシーラーの『シンボル形式の哲学』は、人間精神の発達を科学へと向かつて進むいわば直線的な「一本道」としてではなく、むしろ「複線的に」芸術によつて再び生命的なものの領野へと回歸する可能性を与えることによつて、単なる「認識の現象学」としてのみならず、それがいつそう包括的に人間の本質を問う「文化の哲学」となるのである。

おわりに

時代背景と芸術形式の意義

ここまでカッシーラーによるシンボル形式としての芸術の理解を考察してきた。彼にとつての芸術は、他のシンボル形式と同様に世界を「客観化」する形式のひとつであるが、それは自然科学的な認識へと進んでいく言語や科学とは異なる方向で作用する。

また、『シンボル形式の哲学』第一巻の邦訳者である生松敬三は、この主著が悟性的認識の考察のみに終始するものでないこと、つまり「理性の批判」が「文化の批判」にまで展開させられた理由は、カッシーラーの生きた二〇世紀初頭という時代背景が大きく影響したと指摘している。⁽²³⁾ それまでの科学・技術への確信的信頼が揺らいだ第一次世界大戦後の一九二〇年代にあつては、自然科学的な認識だけでは汲み尽くすことができない人間の内面的な豊かさの探求が、すなわちロマン主義的なものへの回帰が再びこの時代の要請する大きな問題となつていた。カッシーラーがベルリン大学の私講師という立場で上梓した『実体概念と関数概念』（一九一〇）は、『シンボル形式の哲学』（一九二三―一九二九）の先行研究として知られている。しかしながら彼は、前者に続いてただちに後者の仕事に取り掛かったのではない。つまり彼は第一次大戦後、これら一連の仕事のあいだに『自由と形式』（一九一六）『理念と形姿』（一九二二）という二つの著作で文学者の思想研究に従事している。これらの著作と『シンボル形式の哲学』との関係を、生松は次のように述べている。

これらの精神史的研究の労作においてカッシーラーは、それ以前の著作に示された科学への深い理解に劣ら

ぬ、文学のあらゆる形式への鋭く繊細で豊かな感受性を示しており、とくにゲーテへの強い傾倒ぶりは注目
に値する。ゲーテの言葉——たとえば「精確な感性的想像力」とか「内から外への啓示」とか「世界と精神
との綜合」とか等々——は『象徴形式の哲学』において基本的に重要な箇所で、しばしば援用されているも
のだが、その「象徴形式」という問題発想にもこのゲーテからの影響は深く浸透していると考えられる。⁽²⁴⁾

ここで生松が言うように、カッシーラーの『シンボル形式の哲学』は、彼の思想的遍歴から鑑みると、自然科学的認
識の問題から出発した彼が、文学の問題を経由した後に辿りついた地点であり、ナトルプ (Paul Gerhard Natorp, 1854
- 1924) やローエン (Herman Cohen, 1842 - 1918) に代表される新カント学派からの離反を決定付けた著作となってい
る。彼は一方で「科学は、人間の精神発達における最後の段階であり、人間文化の、最高にして最も特徴的な成果」⁽²⁵⁾
であると認めるが、決して科学や技術を万能的に捉えているのではない。むしろ、世界大戦という大事件によって科学の
あり方自体が問われねばならないなかで、カッシーラー自身もまた芸術形式という科学と根源を一にしながらもそれと
は異なる領野へと展開する機能によって、文化を生み出す精神における本質的な機能を根本から解明しようとしている
のである。

「シンボル形式」としての芸術論の可能性

私たちはカッシーラーの芸術論に関しては僅かな資料しかもっていない
ため、彼の芸術形式に関する一般的な機能的考察を知ることとはできるが、彼が言語や神話、そして科学などに対して
行っているような考察、すなわち芸術それ自体の考察をもつてはいない。それゆえ彼の主張は経験的な具体性を欠いて
いるという点では、彼の芸術論が不完全であると認めざるを得ないだろう。しかしながら人間の認識機能の本質を弁証
法的に明らかにしようとする『シンボル形式の哲学』は、芸術を一つの独立した「シンボル形式」と見なし、科学的認

識のみに傾倒したものとしてではなく、その複線的な広がりとしての芸術論への可能性を示していることは間違いない事実である。⁽²⁶⁾ カッシーラーは時代の要請に応えつつ、人間の文化的な多様性をその全体像において捉えようとするがゆえに、人間における豊かな創造的主観性の可能性を広く認めている。そうした意味においても、彼のシンボル形式の哲学における芸術形式は、他の「シンボル形式」とは異質でありながらも、固有で特殊な価値が与えられているのである。

注

- (1) 本稿は二〇一二年六月に行われた日本ヘルダー学会春期研究発表会での口頭発表をもとにして、加筆と修正を加えたものである。
- (2) Cassirer, *Philosophie der Symbolischen Formen, Teil 1, Die Sprache*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977, S.12. (『シンボル形式の哲学』第一巻「言語」生松敬三・木田元訳、岩波文庫、一九八九年、三三三頁) 以下、邦訳書での出典箇所は括弧内に頁番号のみを記す。尚、引用文は適宜文脈に相応しくなるように必要な修正を加えたうえで用いた。
- (3) Cassirer, *Philosophie der Symbolischen Formen, Teil 1, V-VI*. (一〇頁)
- (4) この著作は「人間文化の哲学への入門」という副題がつけられているが、当初のそれは「哲学的人間学」という副題であった。
- (5) カッシーラーの手紙は、*Symbol, Myth, and Culture, Essays and Lectures of Ernst Cassirer 1935-1945*, Yale University Press, New Haven and London, 1979, p.25. に所収された、編者チャナルド・ヴィリーニによる序章からの引用。(『象徴・神話・文化』

D・P・ヴィリーニ編、神野慧一郎・蘭田坦・中才敏郎・米沢穂積訳、ミネルヴァ書房、一九八五年、三二頁）

- (6) Cassirer, Der Begriff der symbolischen Form im Aufbau der Geisteswissenschaften, in: *Wesen und Wirkung des Symbolbegriffs*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977, S.175.

この論文はワールブルク文庫においてカッシーラーが行った講演録であり、それは『シンボル形式の哲学』第一巻の刊行に先立つものである。この講演においても芸術について触れた箇所があり、それがかなり早い段階から彼の知的関心の的であったことが分かる。

- (7) Cassirer, *An Essay on Man*, Yale University Press, New Haven, 1944, p.146. (『人間』宮城音弥訳、岩波書店、三〇九頁)
(8) Cassirer, *An Essay on Man*, p.143. (三〇三頁)
(9) Cassirer, *An Essay on Man*, p.143. (三〇四頁)
(10) Cassirer, *An Essay on Man*, p.145. (三〇七頁)
(11) J. M. Krois, *Cassirer, Symbolic Forms and History*, Yale University Press, New Haven, 1987, p.132.
(12) Cassirer, *Symbol, Myth and Culture, Essays and Lectures of Ernst Cassirer 1935-1945*, Yale University Press, New Haven, 1979, p.145 (一七一頁) 以下参照。

- (13) Cassirer, *Symbol, Myth, and Culture*, p.150. (一七七頁)
(14) Cassirer, *Symbol, Myth, and Culture*, p.152. (一八〇頁)
(15) Cassirer, *Symbol, Myth, and Culture*, p.152. (一八〇頁)
(16) Cassirer, *Symbol, Myth, and Culture*, p.160. (一八九頁)
(17) 芸術形式としての「詩」が果たす役割についてカッシーラーは、偉大な詩人たちの名を挙げつつ次のように力説する。「ダントーの、シェイクスピアの、そしてゲーテの作品によつて本質的な変化を受けたのである。それら言語は新しい言葉によつて豊かになったばかりでなく、新しい形式によつても豊かにされたのである。しかし、そうは言っても、詩人は完全に新しい言語を鑄造することはできない。彼は自分の言語の基本的な構造法則を尊重しなくてはならない。つまり、詩人は自分の言語の文法的、語形論的、統辞論的諸規則に順応しなくてはならないのである。しかしこれら諸規則を守つていても、詩人はそれにたんに服従しているのではない。詩人はそれらの規則を支配し新しい目的へと向けることができる」と。

Cassirer, *Symbol, Myth, and Culture*, p.161-162. (一九一頁)

- (18) カッシーラーによるウゼナーの受容についてさらに詳しくは、齊藤伸『カッシーラーのシンボル哲学』知泉書館、二〇一一年、五八頁以下を参照。

- (19) この点についてさらに詳しくは齊藤伸、同上書、五五頁以下参照。

- (20) Cassirer, *Sprache und Mythos*, in: *Wesen und Wirkung des Symbolbegriffs*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977, S.156. (『言語と神話』岡三郎・岡富美子共訳、国文社、一九七二年、一三五頁)

- (21) Cassirer, *Sprache und Mythos*, S.157. (一二六頁)

- (22) Michael Holquist, "Art" and "Science" in The Philosophy of Symbolic Forms; in *Symbolic Forms and Cultural Studies*, ed. by Hamlin and Krois, Yale University Press, 2004, p.58-59 参照。

- (23) 生松は次のように当時のカッシーラーがおかれていた状況を推測している。

「歴史的諸事件の嵐のとき進行は、現実の諸問題へのアプローチを一新し、それを理解するための別の手段・方法が必要とすることを教えたのである。カッシーラーが、悟性的認識だけが精神的活動のすべてでなく、またそれのとらえる現実だけが現実のすべてではありえないとして、認識理論の原理的拡大の必要を痛感し、〈シンボル形式〉の理論の構想に到達したのも、直接的なだれかれの影響云々は別として(たとえばフッサールの現象学的方法の摂取の問題)、まさしく時代の要請したところであった」と。(生松敬三『現代思想の源流』河出書房新社、一九七七年、八二頁)

- (24) 生松敬三、前掲書、八一頁。ここで生松が指摘しているゲーテへの言及は、Cassirer, *Philosophie der Symbolischen Formen, Teil I* のなかに見られる。それぞれ「精確な感性的想像力」(exakte sinnliche Phantasie)がS.20 (四五頁)、「内から外への啓示」(von den Inneren an das Äußerer gehende Offenbarung)と「世界と精神との総合」(Synthese von Welt und Geist)はS.48 (九〇―九一頁)に見られる。

- (25) Cassirer, *An Essay on Man*, p.207. (四三八頁)

- (26) たとえばカッシーラーが取り上げたシンボルの問題を「美学」へと拡大させたのはアメリカの美学者スザンヌ・K・ランガーであり、彼女が『シンボル形式の哲学』の孕むいわば欠損部を補っていると言いうことができる。

参考文献

Ernst Cassirer

- *An Essay on Man*, Yale University Press, New Haven, 1944.
- Der Begriff der symbolischen Form im Aufbau der Geisteswissenschaften, in: *Wesen und Wirkung des Symbolbegriffs*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977.
- *Philosophie der Symbolischen Formen, Teil 1, Die Sprache*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977.
- *Symbol, Myth, and Culture. Essays and Lectures of Ernst Cassirer 1935–1945*, Yale University Press, New Haven, 1979.
- Sprache und Mythos, in: *Wesen und Wirkung des Symbolbegriffs*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1977.

J.M. Krois, *Cassirer, Symbolic Forms and History*, Yale University Press, New Haven and London, 1987.

Michael Holquist, "Art" and "Science" in The Philosophy of Symbolic Forms, in: *Symbolic Forms and Cultural Studies*, ed. by Hamlin and Krois, Yale University Press, 2004.

生松敬三『現代思想の源流』河出書房新社、一九七七年。

齊藤伸『カッシーラーのシンボル哲学』知泉書館、二〇一一年。